

# 青年期における感動経験と共感性の関係

橋本 巖

(教育心理学研究室)

小倉 丈佳

(愛媛大学大学院教育学研究科)

(平成13年10月25日受理)

## Relationships between Emotionally Moved Experiences and Empathic Tendency in Adolescence

Iwao HASHIMOTO and Takeyoshi OGURA

### 問題と目的

「感動」という用語は、自然とのふれあい、芸術や文学の鑑賞、人間関係における情緒の機微、人生の節目における大切な思い出などについて語る場合、「こころ」の動きや揺らぎにまつわる表現として用いられる。そこでは、印象深く時には衝撃的な出会いや発見があり、深く「純粋に」自分をその状況に没入させたこと、心を大きく揺り動かされたことなどの経験が、しばしば「涙」とともに語られる。感動経験は、個人にとって何らかの意味での「よさ」との出会いや発見を含み、貴重でかけがえのない機会であったと回想されることも少なくない。しかし、それは単純に快感情だけの経験ではなく、むしろ混合感情としての性質を有していると思われる。国語辞典によれば、感動とは、「美しいものや素晴らしいことに接して強い印象を受け、心を奪われること (大辞林第2版)」あるいは「深くもの感じて心を動かすこと (広辞苑)」とされている。我々の感情生活について語る時、少なくとも日本人にとっては不可欠な概念であろう。

「感動」は、教育の文脈でもしばしば重視されるが、教師主導の感情操作的な企てに対して上田(1986)は、「感動があとでまざまざとよみがえることを思えば、またある感動の余波がさまざまな波紋をえがき、あらたな感動をよぶということを思えば、個性のことは無視できぬ」との批判を述べている。しかし同時に彼は、「どんな人間も感動する場合には『無防備の裸』であり、それゆえに謙虚に未知とあい対するのだが、そのことは本来感動することがたんなる受動を意味するのではなく、個性的全体的なスケールのある自己統一と深くかかわる可能性をはらんでいる」と、感動の個性的性格と、発達促進的可能性を示唆している。

また、感情の教育という観点から穂山（1981）は、音楽に感動した場合を例として、「感動対象と自分との一体化」を重要な特徴として指摘する。彼は、「感動は音楽がさわやかであり、かつ、自分がさわやかであって、一方を詮索しようとしたり、説明しようとしたり、いいわけをいったりすることがない。音楽も確か、自分も確かであって、不足分が感じられない。」と表現し、「対象と自分とが一体化した感動であるからには、対象の特徴を示す言葉や、自分の特徴を示す言葉でこれをいい表そうとすれば、主語が錯綜した状態になってしまうだろう。主語が無用になるのではない。それは、二つの文脈が両立している状態である。」と述べている。これは、感動の自己没入的、主客融合的状态を端的に示す表現であろう。また穂山（1981）は、「対象と自分との一体化を経験することができないとしたら、対象がいかに関わりをもっているか、自分がいかに関わっているかを感じ取らずに、対象は対象、自分は自分という考えにとられるようになってしまうだろう。」「感動はきわめて特殊な体験であり、かけがえのない対象に自分だけが正対している。そういう特殊な体験を通じて、一般の相対的なよし悪し、どこか不足分のある快感や喜びを見なおす」ことが重要である、とも論じている。このように、感動をきっかけにして、自分と対象との関わりを考えたり、自己の生き方を見つめ直す自己内省などの過程が活性化され、人格発達にとって重要な契機となる可能性もあるだろう。

以上のように、感動という感情経験が人間の心理的発達に対して持つ意味は非常に大きいと考えられる。そのような問題意識から、本論文も青年期発達における感動経験の意義を解明すべく筆者らが取り組んでいる調査研究の一部を報告するものである。しかし、従来感動に関する心理学的研究—特に実証的な取り組み—は分野を問わずきわめて乏しいのが実状である。その中で、筆者らは以下に挙げるいくつかの調査研究と、穂山（1981）などの理論的考察を先行研究として手がかりとした。

戸梶（1997, 1998, 1999a, b）は、感情研究の一環として感動をとりあげる。「感動は、一般的には肯定的感情に分類されるであろうが、特定の感情カテゴリーには分類不可能である。さらに、その劇的な強さから、情動の一つであり、しかもその余韻は場合によってはかなり長時間持続するものである。このように、感動とは、これほど強く劇的な情動反応でありながら、感情研究の中ではまったくといってよいほど扱われていない」と問題を指摘した。彼は、感動が日本文化独自の概念であり欧米と共通の概念を利用できないことや、概念自体の曖昧さに研究の遅れの一因があると述べて、まず大学生に対して感動生起状況に関する自由記述などを求める一連の調査に着手した。そこから、(1)達成感・充実感、人間関係における情緒的交流に関わる事柄に対して感動が生起しやすく、そこに共感できることが感動の理由であること（性差がある）、(2)全体的特徴として、長い間の苦労や努力が報われるというように、結果に至るまでのプロセスや時間が重視され、経験の有無や関与の程度により感動の大きさが異なるという、ある種の「ストーリー性」が感動には重要であることを認知論的観点から述べている。ただし同時に、ストーリー性が明白に見いだせない「雄大な自然や素晴らしいパフォーマンスへの感動」や、必ずしも成功物語でない「社会的弱者などが健気に努力する姿への感動」などが日常重要な感動である点をも明らかにしている。

たしかに、感動は複雑な混合感情であって一次元的な扱いや境界確定的定義になじみにくく、操作的、数量化的研究には不利な性質がある。その点で、個々人の生活文脈に埋め込まれた経験として、個人的手記や作文により自由記述させる質的方法がまず必要であろう。実際こ

れまでの感動に関する数少ない心理学的研究は、ほとんどが自由記述的手法に基づいている。

例えば、上述の戸梶の一連の研究のほか、速水ら（1993, 1996）は、教育心理学的・動機づけ研究的視点から、青年の感動経験エピソードの報告を収集し、重要な他者から聞いた話やマスコミにおける感動的な話、自分自身の行動に伴って生じた感動経験、あるいは教師から受けた感動経験のエピソードなど、主として対人的状況における感動エピソードの分類を行っている。

ここで、興味深い視点として、速水・陳（1993）は、印象深い感動エピソードが単なる一回性の出来事の域を超えて生涯発達の過程で個人の重要な経験のひとつとなり、特殊な機能を果たす場合に注目した。具体的な感動経験が「動機づけ機能をもつ自伝的記憶」として青年によって繰り返し回想され、自己の励ましや慰めの機能を果たす事例が豊富にあることを、その調査は明らかにしている。青年らは、家族や重要な他者から聞いた感動的な話や自分自身の行動に伴って生じた感動経験を折に触れて思い返している。後には、自分を動機づけたものと同種の感動に繰り返し出会うことや、それを他者と共有することを目標として、人生の選択を行う場合もあると思われる。このような場合、最初は一回性の出来事であった感動が、やがて個人のライフストーリーに位置づけられ、自己概念（あるいは個性）を支える重要な情緒的意味を担う要素となるであろう。そうであるとすれば、感動する傾向には、年齢を重ねるとともに個人差が生まれ、類似の感動事象を実際に多く経験する傾向や、特定の種類の感動経験を選択的に記憶する傾向が強まってくると考えることも、ある程度妥当であろう。しかし、そのような傾向の測定に必要な尺度の開発は従来まったく行われておらず、これまでの自由記述中心の研究手法を補う意味で、研究の進展には必要な試みなのではないかと筆者らは考えた。

そこで、本研究の第一の目的として、大学生に生活史の回想を求める質問紙調査を実施し、印象深い感動エピソードの報告を求めるとともに、その背後にある感動経験の累積・個人差を測定する自己チェック式質問紙を作成し、探索的に因子分析的検討を行う。このような尺度を用いて、われわれは典型的にはどのような感動喚起状況で感動しやすいのかという基本的カテゴリーや次元を特定する作業を積み重ね、感動という感情経験の輪郭を把握していくことが必要であると思われる。

そして、次に本研究では、累積された感動経験と想起された感動エピソードとの対応関係を検討する。特定のカテゴリーを自己報告する被験者は、それまでの生活史においてやはり同じカテゴリーの経験を多く積み重ねているのかという対応関係を検討し、確認しておくことも重要であるだろう。従来の自己報告中心の単独エピソード想起法からは、あたかも想起された感動エピソードが唯一の重要な感動要因であり、それだけによって動機づけや人格的变化が生じたとの推測を誘われるが、速水ら自身、そのような可能性に対して疑問を呈している。確かに、想起者自身が、そのような劇的転機を含むライフストーリーを信じることに問題はない。しかし、理論的関心としては、実際には印象的に思い出される単独エピソードだけでなく同種の（あるいは異種の）感動経験の積み重ねがあってその人の変化が生じるという可能性もまた、重要な発達メカニズムと考えられるからである。

さて、本研究の第二の目的は、青年期における感動経験の心理学的特徴を、共感性との関連分析を通して明らかにすることである。ここで筆者らは共感性（empathy）を、感動傾向と相互に影響し合う個人差要因として位置づけようとしている。このような着眼は、感動の特徴づけを目指す先行研究の取り組みの中に、潜在的にせよ顕在的にせよすでに示唆されている。

例えば、戸梶（1998）は先述のような調査結果をふまえて、感動を「その人にとって強い共感と呼ぶ場面、または、画期的で稀な場面において生起し、心の奥底に響く非常に強烈な情動であり、種々の感情価を持ち、内容に志向性を反映した性差が存在する情動である。特にその状況に至るまでの過程に対する熟知度や経験の有無によって程度が異なる。」と定義・説明した。ここには明白に感動が生起する要因として共感の重要性が主張されている。ここでいう共感について、戸梶（1999b）では、スポーツ競技者が不調を克服して勝利するシーンに、自己の社会人としての辛苦の「類似経験」を想起して共感を感じる場合が例示されている。つまり自己関与して観察できる状況で、想定された主人公の心理や言動が、期待された価値や自己の感情経験と一致することを強く実感して肯定するという意味での「共感」と解釈できる。

しかし、感動喚起状況は、そのように他者の姿を観察し共感するという場合だけでなく、他の様式の共感をも含んでいる。まず、自分自身が相互作用の場に参与し当事者として苦勞・努力する状況では、他者から思いがけない援助を受けて感動することがある。そこでは他者の苦痛に敏感に配慮し合えることや、一時的に感情が不安定であることなどがむしろ他者と感情の共振を促し、感動を高めるかもしれない。また反対に、自然の営みや景観、芸術作品などの美的対象との出会いに感動するという場合、感動対象が向こうから我々を名指して相互作用を求めて来るわけではない。しかしそこで感動が生じる場合、穂山（1981）や上田（1986）によれば、「対象と一体化した感動」、「対象と純粋に『無防備の裸』で向き合っている感動」が経験されるという。これは人間の姿をしていない対象とわれわれがあたかも二者関係をもっているかのように想像する感情移入を必要とする事態であろう。

以上のように、近年多面的に捉えられ議論されている共感性理論からは、様々な形の共感が働いて感動が生起する可能性を考えることができる。本研究では、Davis（1983, 1999）の共感性研究に依拠して作られた共感性質問紙（橋本・角田, 1992；橋本, 1995）を用いて、どのような共感性因子が青年期の被験者の感動経験と相関を示すかを明らかにしようとする。ここでは、他者への「愛他的関心（暖かさ）」、観察者として代理的に体験した苦痛感情に動揺し混乱させられてしまう「個人的苦痛」、認知的に他者の視点をとって考えようとする「パースペクティブテイキング」、演劇や文学などの、架空状況にある人物や擬人化された登場人物に、想像的に自分自身を置き換えて同一視する「空想（想像的感情移入）」などの側面が区別されている。

本研究では特に2つの共感性因子に注目する。ひとつは、古典的感動研究の中に見られる概念化と共通し、共感の原義となった感情移入 *Einfühlung* の側面として、上記の中の「想像的感情移入（空想）」傾向に注目する。小谷津（1987, 1996）は、言語的媒体によって表現された世界の共感的認識に関して、「感性や感情を通して、ときには美的快感情に訴えて、そのものごとを自己没入的に受容する作用である。ものごとに自己を没入させて全心的に感じ取る主客融合を究極点とする」と述べ、詩、俳句、和歌などの韻文や物語の鑑賞における重要性を示唆している。ここに見られる自己没入、主客融合といった体験は、感動体験にも共通する重要な要素の一つであると思われる。既に触れたように、感動体験のさなかでは、その状況や対象との出会いの感覚が生じ、それらと何らかの点で「一体化」しているような自己没入感、自他融合感が生じるという。そのような一時的現象を引き起こしやすい個人属性として、想像的感情移入は有力であると思われる。また、特に青年期においては青年期の自己中心性や自己への関心から、外界に対して開かれた関心を働かせにくい発達段階的傾向が指摘されて久しい

(澤田, 1995)。そのような側面からも, 想像的感情移入傾向と感動経験の関連は興味深い。

二つ目の共感性因子は, 個人的苦痛(橋本(1995)に従って「動揺しやすさ」と呼ぶ)である。これは, 緊張した対人状況や感情的に関与する状況の中で, 個人的不安や不快感, 混乱という「自己志向的な」感情が経験されやすい傾向である。先述のように, 感動は感情の大きな揺らぎを生じる事態であり, それが自己制御しきれず赤裸々に現れてしまう経験でもある。また, 心理・社会的苦痛によって感情がたかぶり, 周囲の情動に巻き込まれてしまいやすい状態の時に印象的な出会いが生じると, それが強く心を捉えて感動となる可能性はあろう。共感性因子としての「動揺しやすさ」は, ある面で心の共振を促す「揺れの能力」ともなり得る可能性が橋本(1995)により指摘されているが, 本来は情動的な不安定性の指標であるので, 必ずしも肯定的感情としての感動とはつながらないかもしれない。澤田(1995)によれば, 他者の苦境に接して個人的苦痛を感じやすい傾向は, 明らかに大学生の共感的コミュニケーションを抑制し, 自己指向的な関心へと閉じこもらせてしまう可能性が指摘されている。従って, 「動揺しやすさ」のもつこのような正反対の潜在的方向性がどのように感動との相関に反映されるかが興味焦点である。

## 方 法

**1. 調査対象** 国立大学の複数学部に所属する大学生252名に質問紙を配布, 222名(うち男性93名, 女性129名)の有効回答を得た(有効回答率88.0%)。平均年齢は19.3歳であった。

**2. 手続き** 2000年10月下旬, 大学の講義時間内に質問紙を配布した。まず, 調査目的についての教示, 各質問紙の回答方法・留意点について説明した。また, プライバシーや過去経験に触れることについて述べ, 回答したくない内容については強制しない等の教示を行い, その後, 一斉に実施した。およそ30分ほどの時間を与え, 時間内に全ての質問に回答できなかったものについては自宅へ持ち帰らせ, 日を改めて提出させた。

**3. 調査内容** 調査目的は「感動経験と人間の発達との関係を調べる」として説明され, 下記の質問紙の他に, 自我同一性質問紙や, 感動経験における情緒の変化, 及び自己内省について尋ねる質問項目なども含まれていた。

(1) **共感性質問紙** 「想像的感情移入」と「動揺しやすさ」の尺度が含まれることから, 橋本・角田(1992)の共感性質問紙を用いた。37項目から成り, 橋本(1995)では, 「他者の苦痛への愛他的関心」, 「想像的感情移入(空想)」, 「動揺しやすさ」, 「役割取得(パースペクティブ・テイキング)」という4因子が見出されている。被験者の現在の共感性に関して, 各項目について「非常によく当てはまる(7)」から「まったくあてはまらない(1)」までの7段階評定によって回答させるものである。

(2) **感動経験質問紙** これまで経験してきた感動経験の累積頻度を測定する尺度, 最も印象的な1つの感動経験エピソードの自由記述, また, 記述した感動エピソード後の情緒的变化と自己理解の変化を測定する尺度で構成されている。本稿では, これまで経験してきた感動経験の累積頻度を測定する尺度, 最も印象的な1つの感動経験エピソードの自由記述に関する結果のみ報告する。

①これまで経験してきた感動経験の累積頻度を測定する尺度

感動経験の累積という観点より用いる。予備的検討によって選出された36の感動エピソード

に対し、感動したことが「しばしばある(4)・ときどきある(3)・ほとんどない(2)・1回もない(1)」の4件法で回答させた。そのエピソードそのものを経験したことがないことと、そのエピソードに感動したことがないこととは同じものと見なし、「1回もない」と回答させた。

この尺度は、予備調査を基に自作したものである。予備調査は、2000年2月に実施した質問紙調査であり、大学生122名の回答を得た。質問紙では、1つの感動経験を想起させ、その感動経験の内容・時期・理由を自由記述によって回答させた。

感動場面（感動喚起状況）については、予備調査の回答を、戸梶（1997, 1998, 1999a）の分析などを参考に5つのカテゴリーに分類した。他者の優しさに触れたという経験を集めた「他人の優しさ」、自然や芸術、技術の素晴らしさに驚いたという経験を集めた「素晴らしいものと出会い」、成果や達成の経験を集めた「努力の成果・達成」、別れや卒業の経験を集めた「別れ」、他者の姿に共感した経験を集めた「他者の頑張り・健気さ」の5つである。

その後、各カテゴリーの項目内容を、テレビのドキュメンタリー番組や文献から収集した感動の状況と照らし合わせて吟味し、独自に考案したものについても追加した。その際には、戸梶（1999b）の分析したストーリーのある感動とは異質であり、状況との関与度に関係なく生じる感動であると述べられている「雄大な自然の風景など美しいものへの感動」、また、サクセス・ストーリーとは言えない「別れのシーンへの感動」などの感動についても補えるように留意した。なお、質問項目の文章表現については、感動の際に生じる衝撃や大きな情緒的揺らぎ、出会いや発見・没入感を、「驚いた」、「衝撃を受けた」、「息をのんだ」、「心打たれた」、「気付いた」、「見付けた」、「出会った」などの言葉によって具体的に表し、被験者がより実感しやすい表現を心掛けた。

#### ②最も印象的な1つの感動経験エピソードの自由記述

最も印象的で思い出しやすい感動経験の想起を求め、「いつ頃の出来事か」、「出来事の内容」、「感動した理由」について自由記述により回答させた。

以上、①累積頻度尺度、②感動エピソードの自由記述のいずれについても、「今までの自分の生活を思い出して」として、特に時期の限定はしなかった。②については、「あなたが最も印象に残っている感動経験を一つ選んで、そのことについて教えてください。問3（累積頻度質問紙）で答えてもらったことの中から選んでもいいですし、それ以外のことでもかまいません。最も印象的で、思い出しやすい感動経験を自由に選んで教えてください。」と教示で前書きして説明した。

## 結果と考察

### 1. 共感性の検討

主因子法、Varimax 回転による因子分析を行い、橋本（1995）を参考に、因子1「他者の苦痛への愛他的関心」、因子2「想像的感情移入」、因子3「動揺しやすさ」、因子4「他者の立場への理解」の4因子解を採用した。

「他者の苦痛への愛他的関心（12項目）」には、橋本（1995）と同様に、従来「他者理解の拒否」とされていた項目を「感情的暖かさ」の逆転項目として扱うものとし分類した。「想像的感情移入（8項目）」は、項目の内容について従来のもとはほぼ同じ内容である。「動揺しやすさ（11項目）」については、項目内容が従来のもとは全て同じ因子となった。そして「他者

の立場への理解（6項目）」は、従来「役割取得」とされていた項目に「感情的暖かさ」の項目がいくつか加わって出来た因子である。他者の立場に立つことが出来るという性質の項目に、「かわいそう」、「守ってあげたい」といった感情的暖かさの項目が加わっていることから、「他者の立場への理解」と因子名をつけた。固有値、寄与率、 $\alpha$ 係数は、因子1が固有値7.70、寄与率20.8、 $\alpha$ 係数.867、因子2が固有値3.24、寄与率8.8、 $\alpha$ 係数.862、因子3が固有値2.53、寄与率6.8、 $\alpha$ 係数.820、因子4が固有値1.79、寄与率4.8、 $\alpha$ 係数.771となった。

分散分析によって性差を検討した結果「愛他的関心 [ $F(1, 220) = 22.32, p < .01$ ]」、「想像的感情移入 [ $F(1, 220) = 6.12, p < .05$ ]」、「動揺しやすさ [ $F(1, 220) = 5.73, p < .05$ ]」において女性の平均値の方が有意に高かった。

## 2. 感動経験質問紙の分析

感動経験累積頻度質問紙について、まず項目別に経験率の検討を行った。続いて、因子分析を行い、本研究において感動経験の喚起状況を捉えるカテゴリーを検討した。そして、そのカテゴリーを枠組みとして、各被験者が自由記述した感動エピソードを分類した。

(1) 感動経験累積頻度質問紙各項目の経験率 感動経験累積質問紙の各項目において「しばしばある」「ときどきある」を選んだ人数の全被験者数に対する割合を経験率とし、男女それぞれについて経験率を算出した。その結果を、Table 1 に示した。

経験率を項目別に見てみると、「つらいときに友人や家族から励まされた (81.5)。」、「友人や家族が自分のことを気遣ってくれた (83.3)。」、「皆で協力して何かを成し遂げた (84.7)。」など、愛情・友情・思いやりに触れたり、絆の中で達成感を感じたりといった内容の経験率が高く、「身近な他者との絆」が本研究の被験者にとって感動を引き起こす重要な要素であったことが示唆される。また、「自然（雪の結晶、鍾乳洞など）の神秘的な美しさに触れた (80.2)。」、「雄大な自然（夕焼け、星空、夜景など）を見て驚いた (87.8)。」、「素晴らしいパフォーマンス（音楽の演奏、職人の技、スポーツ競技など）に息をのんだ (81.5)。」など、自然の雄大さや素晴らしいパフォーマンスに衝撃を受けたといった内容についても経験率が高い。男女とも最も高かったのが「雄大な自然（夕焼け、星空、夜景など）を見て驚いた。」であり、驚き・衝撃によって心が揺り動かされることが、感動を覚えることにつながりやすかったのであろう。ほとんどの項目において男性より女性の方が経験率が高くなっている。しかし、例外的に、「壮大な建造物の姿やそのテクノロジーに驚いた」や「昔は考えられなかったテクノロジーのすごさ（コンピューターなど）に衝撃を受けた」の項目は、男性が女性よりも高い経験率を示している。

また、「自分がどんなに辛いときでも、変わる事のない生命の営みに心打たれた。」や「生命の誕生の瞬間を目撃した。」の項目は経験率が低かった。命を実感する体験や自然体験は近年、学校教育をはじめ様々な場面で重要視され、感動が伴うものだと期待されがちだが、経験率は意外と低いものにとどまっている。

(2) 感動経験累積頻度質問紙の因子分析 (Table 1 参照) 感動経験累積質問紙において、「1回もない」の回答数が8割を超えている項目を除外した後、因子分析を行った。1回目の因子分析後、因子負荷が.30未満のものについては項目を削除した。また、因子負荷がそれほど高くなく、他の因子にも.05未満の差で因子負荷がまたがっており、かつ、意味的にその因子だと解釈しにくいものに関して項目を削除した。それらの項目を削除した上で、再び因子分析にかけ、最終的に主因子法、Varimax 回転による3因子解を採用した。

Table 1 感動経験累積頻度質問紙の因子分析結果 (主因子法・Varimax 回転・因子負荷.30以上)

No	項 目	F1	F2	F3	経験率		
					(全体)	(男性)	(女性)
<b>因子1「身近な他者との絆を感じたり、自分にとって大切なものを得た感動(14項目)」</b>							
10.	友人や家族から思いがけない優しい言葉をかけられた。	.700			76.6	63.4	86.0
2.	つらいときに友人や家族から励まされた。	.656			81.5	65.6	93.0
19.	友人や家族が自分のことを気遣ってくれた。	.635		.327	83.3	73.1	90.7
22.	いつでも影で支えてくれている友人の存在のありがたさに気付いた。	.629			74.3	58.1	86.0
6.	テレビの別れのシーンで、自分の寂しさ、悲しさを思い出した。	.601			55.4	47.3	61.2
27.	卒業式などで、別れの寂しさ、悲しさを味わった(今までの思い出がよみがえってきた)。	.526	.339		62.6	55.9	67.4
18.	大会・試合などで自分が駄目だと思っていたことが予想外に好転した(好結果をおさめた)。	.512			65.8	50.5	76.7
14.	先生や恩師の言葉の中に自分にとって大切なものを見つけた。	.487	.441		64.0	51.6	72.9
20.	詩・文学作品・歌詞の中の言葉に自分にとって大切なものを見つけた。	.478	.320		62.6	50.5	71.3
28.	好きな人の体に触れた。	.476			56.3	52.7	58.9
5.	皆で協力して何かを成し遂げた。	.456	.396		84.7	78.5	89.1
24.	志望校・資格試験などで努力が実り、合格した。	.447	.307		64.4	50.5	74.4
35.	ずっと好意を寄せていた人とつき合うことが出来た。	.445			40.1	31.2	46.5
21.	自分の応援しているチーム、人物が好結果をおさめた。	.439			64.9	61.3	67.4
<b>因子2「困難な状況にありながらも、他者の一生懸命な姿・純粋な姿への感動(8項目)」</b>							
34.	自分のことを犠牲にしても、他人のために尽くしている人の姿に心打たれた。		.715		49.5	38.7	57.4
17.	夢に向かって情熱を燃やしひたむきに頑張る人の姿を見て(出会って)その生き方に心打たれた。	.351	.667		62.2	50.5	70.5
12.	自分の危険を省みず人の手助けをしている人の姿を見た。	.307	.661		50.0	40.9	56.6
8.	見返りを期待せず、ひたむきに頑張る人の姿に心打たれた。		.642		60.4	47.3	69.8
25.	ハンディキャップを持っている人(けがを負った人・障害を持った人)が一生懸命生きていて、頑張っている姿を見た。	.357	.529		62.2	45.2	74.4
3.	なりふり構わず努力し、苦難を乗り越えて成功した人の姿を見た。		.520		69.8	59.1	77.5
30.	自分(人間)がどんなに辛いときでも、変わることのない生命の営み(自然など)に心打たれた。		.440	.414	29.7	23.7	34.1
36.	生命の誕生の瞬間を目撃した(人間、動物、植物など)。		.388	.320	32.9	30.1	34.9
<b>因子3「自然・芸術・技術の想像を超えた素晴らしさへの感動(9項目)」</b>							
26.	自然(山、草原、海、砂漠など)の想像以上の大きさ・雄大さに驚いた。			.725	77.5	73.1	80.6
11.	壮大な建造物の姿やそのテクノロジーに驚いた。			.681	48.6	50.5	47.3
4.	自然(雪の結晶、鍾乳洞など)の神秘的な美しさに触れた。			.618	80.2	75.3	83.7
13.	昔は考えられなかったテクノロジーのすごさに(コンピュータなど)に衝撃を受けた。			.610	42.3	45.2	40.3
16.	雄大な自然(夕焼け、星空、夜景など)を見て驚いた。			.565	87.8	79.6	93.8
23.	素晴らしい絵画に出会った。			.479	41.4	34.4	46.5
9.	厳しい環境の中でもしっかりと生きる小さな生命(植物、動物など)の営みに気付いた。	.384	.442		54.1	48.4	58.1
33.	素晴らしいパフォーマンス(音楽の演奏、職人の技、スポーツ競技など)に息をのんだ。		.441		81.5	76.3	85.3
7.	今まで触れたことのない分野のことを経験し、新しい考え方や世界に触れた。		.418		68.0	67.7	68.2
	固有値	8.98	2.36	1.25			
	寄与率	29.0	7.6	4.0			
	$\alpha$ 係数	.884	.853	.816			

(注) 経験率……「ときどきある」「しばしばある」を選んだ人数の全被験者数に対する割合。

第1因子については『身近な他者との絆を感じたり、自分にとって大切なものを得た感動』と命名した。他者の優しさを感じたり、これまでの人との関わりを思い出したりして、他者との絆を感じたことによって起こる感動である。また、努力・苦勞の成就や期待・希望の実現、本や恩師の言葉などを通して大事な事に気付いたなど、有形無形に関わらず自分にとって大切なものを得たことによって起こる感動である。総じて、自分が実際に関与している出来事の中で感動が起こっている。自分の応援しているチームや人物が勝利を収めたことで起こる感動についても、このカテゴリーに分類される。それは、チームや人物と一緒に勝利を喜ぶ感覚が、自分自身が勝利を収めたときの感覚とほぼ同じであり、大切なものを得ていると考えられるからである。この因子は、予備調査では「他人の優しさ」、「努力の成果・達成」、「別れ」とされた項目が負荷した因子である。関係的自己の確認・発見、苦勞・努力による達成など、自己の拡大感、高揚感を伴うと思われる感動である。

第2因子は『困難な状況にありながらも他者の一生懸命な姿・純粋な姿への感動』と命名した。困難な状況の中にありながらも、ひたむきに懸命に生きている人の姿、また、植物や動物の純粋でしたたかな姿を見たことによって起こる感動である。たいていの場合、これらの姿を



テレビ・新聞などで、自分以外の人やものの姿を見て起こるという点で、自分が直接には関与していない事柄から受ける感動と言える。第1因子に比べて、客観的要素が強いのがこのカテゴリーの感動であると思われる。第3因子の感動との重複はあるが、第2因子に負荷したものとして、“生命の誕生の瞬間を目撃した”や“自分がどんなに辛いときでも、変わることのない生命の営み（自然など）に心打たれた”のような、生命や自然に関するものがある。前者の生命の誕生については、新しい命がひたむきに生きようとしている姿、母体などが産み出そうと努力する姿を目撃したという考えから、第2因子の感動カテゴリーに分類した。後者の生命の営みについては、第3因子のような驚き・衝撃といった要素が強くなり、むしろ、自分が辛いときに、自然などの生命の当たり前の営みにふれて、そのしたたかな姿に癒されるという要素が強いと推測されたことから、第2因子に分類した。感動は、ある種の純粋さや理想と出会ったという感覚を伴う。この第2の感動カテゴリーは、その点で理想的で一貫性のある対象の姿（いわばモデル）を明確に提示される経験とも考えられる。

第3因子は『自然・芸術・技術の想像を超えた素晴らしさへの感動』と命名した。自然、絵画・音楽などの芸術作品、建築物やスポーツなどで見られる技術の想像を超えた素晴らしさへの感動である。自分を超えた大きな存在への驚きや衝撃といった要素の強い感動ともいえよう。

以上の検討により、戸梶（1999b）の分析したサクセス・ストーリーによって喚起される感動とは異質であり、ストーリーの有無に関わらず起こる「自然、絵画などの美しいものに対する感動」を一つのカテゴリーへ、また、ストーリーのあるものの中でも自分が直接的に関与し体験するものと、客観的な立場において体験するものとをそれぞれ別のカテゴリーへ分類することが出来た。

各因子を構成する項目の合計得点を平均し、分散分析により検討した結果、性差のあったカテゴリーは、「絆や大切なものへの感動 [F(1, 220)=36.13, p<.01]」と「他者の姿への感動 [F(1, 220)=20.61, p<.01]」であった。各カテゴリーの累積頻度平均値は、女性の方が高いことが示されている。「自然・芸術・技術への感動」においても、女性の方が高い傾向差が認められた [F(1, 220)=3.58, p<.10]。また、因子間相関については、因子1-2間が  $r=.665$  ( $p<.01$ )、因子1-3間が  $r=.398$  ( $p<.01$ )、因子2-3間が  $r=.476$  ( $p<.01$ ) であった。

**(3) 感動エピソードの3カテゴリーへの分類** 感動経験累積頻度を測定する尺度の因子分析の際に作成された分類基準に基づき、感動エピソードを3カテゴリーに分類した。分類基準作成の際には、研究計画について熟知しない大学生一名に協力を仰いだ。まず、協力者が独立に行った分類と筆者らの分類との一致度を算出した（1回目の一致度87.0%）。その後、話し合いによって協力者も納得できる分類基準を検討、作成した。内容が理解できないと判断されたエピソードは分類不可能とした。

各カテゴリーの男女別人数分布を Table 2 に示した。カイ二乗検定の結果、性差は有意ではなかった。

絆や大切なものへの感動のエピソードが他種の感動に比

Table 2 感動エピソードの男女別度数と生起率 (%)

性別	絆や大切なものへの感動	他者の姿への感動	自然・芸術・技術への感動	分類不能	合計
男性	62(66.7)	10(10.8)	16(17.2)	5( 5.4)	93(100)
女性	96(74.4)	12( 9.3)	19(14.7)	2( 1.6)	129(100)
全体	158(71.2)	22( 9.9)	35(15.8)	7( 3.2)	222(100)

べ数多く報告されており、戸梶（1997, 1998, 1999a）、速水ら（1993, 1996）の傾向とほぼ一致する結果である。他者からの励ましや、達成体験は、誰にとっても感動を感じやすい体験のようである。また、自分の関与する世界で起こる感動のため、他の感動よりも自覚されやすかったとも考えられる。

特徴的なのは、「他者の姿への感動」の報告数がそれほど多くないことである。戸梶（1997）、速水・陳（1993）において、テレビやマスコミを通して生じる感動が最も多く報告されていたのに対し、本研究の結果はその傾向と一致していない。

次に、感動エピソードの経験時期別の度数分布を Table 3 に示した。どの感動エピソードにおいても、中学・高校・大学が90%以上を占めており、青年期中心の回想が行われたことが裏付けられた。特に、高校・大学時代に起こったものが8割前後と多く報告されている。大学1年生が多く、平均年齢19.3歳の被験者にとって、大学時代や高校時代というのは最近起こった出来事であり、「印象的に残っているもの」という質問に対し、経験時期からの時間の経過が影響したようである。速水・陳（1993）においても、大学生への調査に際して同じ傾向が示されている。反面で、少数ながら、中学校や小学校以前の思い出を想起した者もあり、感動体験が文字通り自伝的記憶としてライフヒストリーの重要な一局面になっている可能性が推測される。なお、「絆や大切なものへの感動」では、高校時代のエピソード比率が高い一方、「他者の姿への感動」では大学時代の出来事が70%と多い。このような感動内容と時期との関係については、さらに検討する必要がある。

Table 3 感動エピソードの経験時期別度数と生起率 (%)

感動エピソード	小学校以前	中学校	高校	大学	時期不明	全体
絆や大切なものへの感動	4 (2.5)	29(18.4)	72(45.6)	51(32.3)	2( 1.3)	158(100)
他者の姿への感動	1( 4.5)	2( 9.1)	2( 9.1)	16(72.7)	1( 4.5)	22(100)
自然・芸術・技術への感動	1( 2.9)	6(17.1)	11(31.4)	17(48.6)	0( 0)	35(100)
合計	6( 2.8)	37(17.2)	85(39.5)	84(39.1)	3( 1.4)	215(100)

(注) 感動エピソード分類不可能者7名除く

### 3. 感動エピソードと感動経験累積頻度との関係

最も印象的な感動エピソードが、これまでに経験してきた感動経験の中でどういう位置にあるのかを調べる。数多く累積した感動経験の代表として同種のエピソードが想起されやすいかどうかを検討する。まず、自由記述された感動エピソード別、男女別に感動経験累積頻度の平均値を算出した (Table 4)。

自由記述カテゴリ(3)×性別(2)の2要因分散分析の結果、「絆や大切なものへの感動」累積頻度の平均値において報告カテゴリの主効果が見られた [ $F(2, 209)=10.39, p<.01$ ]。カテゴリ間の比較によって、「絆や大切なものへの感動」エピソードを報告した者が、「自然・芸術・技術への感動」エピソード報告者よりも累積頻度が高いことが示された [ $F(2, 212)=9.22, p<.01$ ]。また、カテゴリ×性の交互作用効果にも傾向差が示された [ $F(2, 209)=2.82, p<.10$ ]。単純効果検定の結果、男性において「絆や大切なものへの感動」エピソード報告者は、他の感動エピソード報告者よりも「絆や大切なものへの感動」累積頻度が高かった [ $F(2, 85)=8.89, p<.01$ ]。女性においては有意な差が見られなかった。

「絆や大切なものへの感動」の累積頻度は、同種のエピソード報告者の方が、他種のエピソード

Table 4 感動エピソード別・男女別による感動経験累積頻度の平均値(標準偏差)

感動エピソード		感動経験累積頻度		
		絆や大切なものへの感動	他者の姿への感動	自然・芸術・技術への感動
絆や大切なものへの感動	(男性)	38.87( 7.16)	19.44( 4.97)	24.79( 5.21)
	(女性)	43.25( 6.83)	21.40( 4.50)	25.52( 4.40)
	(合計)	41.53( 7.26)	20.63( 4.77)	25.23( 4.73)
他者の姿への感動	(男性)	31.90( 8.53)	18.90( 6.17)	23.30( 6.33)
	(女性)	42.42( 7.04)	23.42( 4.19)	25.17( 4.20)
	(合計)	37.64( 9.27)	21.36( 5.55)	24.32( 5.22)
自然・芸術・技術への感動	(男性)	30.75( 9.74)	16.38( 6.30)	24.94( 5.79)
	(女性)	39.89( 6.43)	21.68( 5.21)	27.68( 4.62)
	(合計)	35.71( 9.22)	19.26( 6.25)	26.43( 5.29)

ード報告者よりも高いことが示唆された。しかし、「他者の姿への感動」や「自然・芸術・技術への感動」の累積頻度には、報告カテゴリによる有意な差が得られていない。これら2種の感動エピソード報告者においては、単純に数多く累積した経験の代表が想起されやすかったのではなく、想起を求められた際の、何らかの主観的意味づけや検索のあり方、個人的傾向性の相違などの諸要因が影響していたのだろう。いずれにせよ、本分析から、被験者が一つの印象的な感動経験を想起・報告できる背後には、同種の感動経験だけでなく、異なる種類の感動経験も累積されていることが読みとれる。

#### 4. 感動経験と共感性との関係

(1) 共感性尺度と感動経験累積頻度との相関 各共感性因子が感動の累積とどのような関係性を持っているのかを検討するため、感動経験累積頻度と共感性尺度との相関係数を算出し、Table 5 に示した。全被験者においては、「想像的感情移入」、「他者の立場への理解」はどの感動の累積頻度とも有意な正相関を示している。「愛他的関心」、「動揺しやすさ」は、「絆や大切なものへの感動」との相関が他種の感動との相関よりも有意に高い(愛他的関心における K1-K2 間;  $t(219)=2.95, p<.01, K1-K3$  間;  $t(219)=8.08, p<.01$ , 動揺しやすさにおける K1-K2 間;  $t(219)=3.81, p<.01, K1-K3$  間;  $t(219)=4.22, p<.01$ )。

男性においても、全体の傾向とほぼ同じ相関傾向を示している。全被験者、男性において、どの感動の累積頻度とも有意な相関を示していたのは「想像的感情移入」と「他者の立場への理解」であった。しかし、女性においてはそれらとは異なった傾向を示している。女性において、それらの共感性尺度と「自然・芸術・技術への感動」の累積との間で有意な相関が示されていない。「他者の姿への感動」と「動揺しやすさ」、「想像的感情移入」との関係においても、全体、男性と比べて相関の程度が弱い部分が見られる。女性は、平均値では男性よりも感動経験頻度は高いが、どの種の感動体験も共感性と関係しているとはいえないようであった。

全被験者における共感性との相関によってそれぞれの感動を特徴づけてみよう。「想像的感情移入」、「他者の立場への理解」は3種の感動との間に一貫して相関を示しているため、3つの感動それぞれを区別するのは、「愛他的関心」や「動揺しやすさ」との相関の程度であると考えた。

「絆や大切なものへの感動」の累積頻度は、「愛他的関心」と「動揺しやすさ」のどちらとも正相関がある。また、有意差検定の結果、「愛他的関心」との相関が、「動揺しやすさ」や

「他者の立場の理解」との相関よりも有意に高いことが示された（「愛」-「動」間  $t(219) = 3.67, p < .01$ ；「愛」-「他」間  $t(219) = 3.22, p < .01$ ）。「絆や大切なものへの感動」は対人的・社会的状況における感動であり，他者との情緒的交流を行う上で，「想像的感情移入」や「他者の立場への理解」のみならず，「愛他的関心」や「動揺しやすさ」も重要であるのだろう。ここで，「絆や大切なものへの感動」の項目には，一種の情緒的問題からの立ち直りや課題達成状況が含まれており，そこでは情緒的混乱や不安，強い興奮，集団情動，などが経験されやすいと推測される。一方，「動揺しやすさ」という特性は，ある種の情緒的制御困難の傾向であるが，その尺度がこのカテゴリーの感動と正相関したことから，生じる情動反応を強く抑制するのでなく，それらを発散させるような面を必要とする感動なのかもしれない。また，特に苦境で受けた援助に感動する場合のように，むしろ情緒的な不安定傾向（あるいは不安定な状態）が顕在化している場合に，体験した事象がより感動的と感じられる仕組みが働きやすいとも考えられよう。

「他者の姿への感動」は，「想像的感情移入」，「他者の立場への理解」に加えて「愛他的関心」とも中程度の正相関を示しているが，「動揺しやすさ」との間にはかなり低い相関しか見られない点が特徴的である。前3者の共感尺度と他者の姿への感動経験累積度との相関は，動揺しやすさとの相関よりも，いずれも有意に高い（「想」-「動」間  $t(219) = 3.15, p < .01$ ；「他」-「動」間  $t(219) = 3.14, p < .01$ ；「愛」-「動」間  $t(219) = 4.20, p < .01$ ）。この種の感動経験は，他者の状況の成り行き（ストーリー）に愛他的関心を向け，他者の立場に自己を置いて考えようとする傾向が感動経験の生起とつながると思われる。しかしここでは，他者の姿に感情移入して代理的感情が喚起されても，それが強い動揺や個人的苦痛と感じられてしまうと感動対象への関心そのものが維持されず，結果的に他者への感動として経験されにくくなるのかもしれない。そのように解釈すると，愛他主義的な意味での共感性がもっとも典型的に発揮されて感動につながる場合とも考えられよう。

「自然・芸術・技術への感動」は，「想像的感情移入」と「他者の立場への理解」とは有意な相関を示すが，「愛他的関心」及び「動揺しやすさ」との間には相関関係が示されていない。

Table 5 共感性各尺度と感動経験累積頻度との相関

共感性尺度		絆や大切なものへの感動(K1)	他者の姿への感動(K2)	自然・芸術・技術への感動(K3)
愛他的関心	(全体)	.575**	.442**	.093
	(男性)	.520**	.450**	.109
	(女性)	.524**	.326**	.005
想像的感情移入	(全体)	.465**	.400**	.339**
	(男性)	.541**	.542**	.603**
	(女性)	.333**	.191*	.010
動揺しやすさ	(全体)	.349**	.153*	.057
	(男性)	.352**	.165	.023
	(女性)	.284**	.066	.053
他者の立場への理解	(全体)	.393**	.394**	.211**
	(男性)	.413**	.417**	.383**
	(女性)	.358**	.352**	.023

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$

この感動は他の感動に比べ、愛他的同情心や情緒的不安定性によって左右されない性質を持つと言えよう。それは、このカテゴリーの感動対象が明らかに自己とは異なる事物であり、さらに、対象は同情すべき状態というよりも素晴らしい（美しい）事物や行為であることが多いためであろう。明らかに自己とは異なり、自分の想像を超えた卓越性・素晴らしさを示す対象に出会い、驚きとともに惹きつけられ、ある種の一体感や自他融合感が生じると推測される。このような感動を経験するには、自他の相違に気づいてもなお他者に関心を向ける役割取得的傾向や、自然や景観に自己を重ねられる想像的感情移入が重要なのであろう。

全体的傾向として、3種の感動と一貫して相関を示したのは想像的感情移入と他者の立場への理解であった。予想とは異なり、より多く感動する傾向は、「動揺しやすさ」が表すような情緒的な不安定性や被影響性が単純に反映されたものではない。むしろ、自分と異なる世界や他者に対して肯定的な関心を向け、それらがもっている内面的な性質を理解しようとする傾向と共通する成分をもっているのかもしれない。さらに、他者（あるいは対象）の内面として想定された世界に自己を想像的に重ね、感情移入することによって感じ取ろうとするような傾向でもあるのだろう。このように考えると、感動は、単に受動的に操作されて感情を動かされる傾向ではなく、能動的に外界や他者をわかろうとする傾向のあらわれなのかもしれない。

**(2) 共感性尺度と感動エピソードとの関係** 共感性の性質が、被験者が質問紙に回答する際に想起する感動経験と関係しているのかを調べる。感動エピソード別、各共感性尺度得点の平均値を Table 6 に示す。

性別(2)×感動エピソード(3)の二要因分散分析を行った結果、「愛他的関心」において感動エピソードの相違による主効果が有意であった [ $F(2, 209)=3.29, p<.05$ ]。また、「動揺しやすさ」において性×感動エピソードの交互作用効果が有意であった [ $F(2, 209)=4.16, p<.05$ ]。主効果の見られた「愛他的関心」において、下位検定の結果、「絆や大切なものへの感動」エピソードを報告した人は、「自然・芸術・技術への感動」を報告した人よりも、「愛他的関心」が高いことが示された [ $F(2, 212)=3.27, p<.05$ ]。これは、前節(1)において、「愛他的関心」と「絆や大切なものへの感動」との相関係数が特に高かったことと一貫する結果である。つまり「愛他的関心」の高さが、「絆や大切なものへの感動」を累積することと、想起することの両方に関係していることが示された。

交互作用の単純効果の検定の結果、男性において「絆や大切なものへの感動」を報告した者

Table 6 感動エピソード別共感性尺度得点の平均値（標準偏差）

感動エピソード	性別	愛他的関心	想像的感情移入	動揺しやすさ	他者の立場への理解
絆や大切なものへの感動	(男性)	59.13(10.59)	36.55(10.22)	48.47( 8.52)	26.24( 5.87)
	(女性)	64.63(10.18)	38.91( 8.61)	49.32( 9.11)	28.06( 5.65)
	(合計)	62.47(10.66)	37.98( 9.32)	48.99( 8.87)	27.35( 5.79)
他者の姿への感動	(男性)	55.60(10.41)	35.80(10.10)	41.00( 9.71)	27.10( 7.55)
	(女性)	64.50( 8.10)	42.67( 6.72)	48.50(10.08)	29.00( 4.51)
	(合計)	60.45(10.07)	39.55( 8.92)	45.09(10.40)	28.14( 6.00)
自然・芸術・技術への感動	(男性)	51.81(12.97)	35.31(10.40)	40.94(11.01)	25.63( 5.04)
	(女性)	62.00( 9.88)	35.58( 7.73)	50.84( 8.89)	24.84( 4.39)
	(合計)	57.34(12.35)	35.46( 8.91)	46.31(10.97)	25.20( 4.65)

は、他の2つの感動の報告者よりも「動揺しやすさ」の平均値が高いことが示された〔F(2, 85)=6.19,  $p<.01$ 〕。それに対し、女性においては有意な差は見られなかった。

(3) 感動因子間相関における共感性の役割 感動の3因子間には、有意な正相関がある (Table 7)。つまり、異なる状況としての性質を持ちながらも、その状況の相違をある程度越えて、個人の中で互いに結びつきあっているといえる。その結びつきを支えている要因として、共感性の影響を検討した。

すでに述べたように、共感性と感動経験累積頻度の相関において、想像的感情移入と他者の立場への理解が、すべての感動経験累積頻度と正相関を示した。もし、これらの共感性を制御した時に、感動因子間の相関が弱まれば、もとの相関は、共感性の影響を受けていたことになる。そこで、これらの共感性因子を制御した偏相関係数を求めた (Table 7)。想像的感情移入と他者の立場への理解を制御した結果、表の視察によれば、全被験者においては予想どおり、感動因子間の相関が低下した。他の共感性因子（及びそれらの組み合わせ）についても制御変数として順次設定して検討したが、上記の2因子を制御した場合に、感動因子間相関の値が最も低いものになるようであった。全体的傾向としては、感動因子相互に見られた実質的なつながりを支える要因は、これらの共感性であることが示唆された。想像的感情移入や他者の立場の理解（役割取得）傾向は、それぞれの感動経験を累積しやすくすると共に、個人にとって多様な感動を類似の感動経験として共通的に受けとめさせる傾向を高めると考察できる。

男性ではさらにはっきりと、偏相関係数が有意でなくなる程に低下することが見られた (K2とK3との相関)。男性における「他者の姿への感動」と「自然・芸術・技術への感動」間の相関は、これらの共感性によって生み出された見かけの相関であったようである。全体及び男性における結果からは、今後、被験者の個人属性としての共感性のあり方を統制した上で因子構造を検討する必要があると示唆される。

一方、女性においては共感性の制御による相関の低下は明瞭ではなかった。女性においては、さらに異なった要因が因子間相関の高さを維持させているのであろう。個別の因子における平均値の高さだけでなく、因子間相関のあり方に本質的な性差があるのならば、今後は男女別に因子分析するなどの方向でより微妙な感動の構造を探索する必要があるであろう。

ただし、男女いずれにおいても、「絆や大切なものへの感動」と「自然・芸術・技術の素晴らしさへの感動」とは相関が比較的低いことが偏相関分析から示されたことを考慮すると、「自然・芸術・技術の想像を超えた素晴らしさへの感動」は、他の2種類の対人的な感動状況とはやはり異質性が高いと確認されたと言えるのではないだろうか。

Table 7 感動経験累積頻度の因子間単相関と、共感性（想像的感情移入・他者の立場への理解）を制御した偏相関

因子間相関のパターン	全 体		男 性		女 性	
	単相関	偏相関	単相関	偏相関	単相関	偏相関
K1×K2	.665**	.554**	.663**	.489**	.586**	.521**
K1×K3	.398**	.272**	.573**	.334**	.168	.175*
K2×K3	.476**	.383**	.456**	.148	.471**	.497**

(注) K1；絆や大切なものへの感動累積頻度 \* $p<.05$  \*\* $p<.01$   
 K2；他者の姿への感動累積頻度  
 K3；自然・芸術・技術への感動累積頻度

## 要約的結語

本研究は二つの目的に沿って進められた。第一の目的は、印象深い感動エピソード報告の背後にある感動経験の累積・個人差を測定する質問紙を作成し、因子分析的検討などにより、感動という感情経験の輪郭を把握することであった。第二の目的は、青年期における感動経験の心理学的特徴を、共感性との関連分析を通して明らかにすることであった。

まず第一の目的に関して、感動経験累積質問紙の因子分析により、三つの因子が抽出され、感動喚起状況は3カテゴリーに分類された。第一カテゴリーは『身近な他者との絆を感じたり、自分にとって大切なものを得た感動』である。この感動は、関係的自己の確認・発見、苦勞努力による達成など、自己の拡大感、高揚感を伴う感動であると考えられる。第二カテゴリーは『困難な状況にありながらも他者の一生懸命な姿・純粋な姿への感動』である。この感動は、純粋さや理想を体現する他者に会った感覚を伴う感動ともいえる。なお第一、第二とも、感動喚起に至るまでに一種のストーリー性が存在する点で共通している。しかし、前者は状況の当事者として直接関与し体験した感動であるのに対し、後者は、テレビ視聴などの傍観者の・客観的立場にある場合に感動的な状況に出会うという形を含んでいる。そして、感動の第三カテゴリーは『自然・芸術・技術の想像を超えた素晴らしさへの感動』である。これは対象の卓越性や斬新さに驚くような感動であり、他種の感動と比べ、感動に至るストーリーが明確でない点、感動対象に人間以外を多く含む点などが特徴である。

また、一つの印象的感動エピソードが想起・報告される背後では、非常に多くの同種・異種の感動経験が累積されていることが示された。本研究においては、他者との絆を体験するような感動エピソードを報告した人は、それと同種の感動経験を多く累積しているという関係性が確認された。他の種類の感動エピソードと経験の累積との対応関係の検討は、これからの課題として残された。また、今後は一つのエピソードのみではなく、経験の累積が発達にどのような影響を与えているかについて検討していく必要がある。

ところで、今後改善すべき問題点として、被験者に感動エピソードの想起を求める際の手続きを検討することがあろう。本調査では、累積頻度質問紙に回答した後にエピソード想起を行わせる一種の手がかり再生事態となっていた。その手がかりとなり得た累積頻度質問紙は「絆や大切なものへの感動」に該当する項目数が他カテゴリーよりも多く、それが結果的に想起エピソード数の偏りを生んだ可能性がある。また、因子分析による項目の解釈から自由記述の分類基準を作成したが、その基準の内包と外延のあり方によっても自由記述の分類結果は異なってくる。特に内容的に類似度が認められ、因子間相関も中程度の高さを示していた第一因子と第二因子（及びそれらを基礎とした分類基準）については、構成概念妥当性の検討も今後の視野に入れ、検討を加える必要があろう。

第二の目的に関して筆者らは、感動と深く関わる共感性として、「想像的感情移入」と「動揺しやすさ」に注目した。分析の結果、「想像的感情移入」は確かに感動経験と相関していたが、「動揺しやすさ」の相関は弱く、むしろ「他者の立場への理解」が一貫して感動と関連していた。また、「愛他的関心」もかなり高い相関を示す傾向があった。以上より、感動経験は、「想像的感情移入」が表すような、他者（あるいは対象）の内面として想定された世界に自己を想像的に重ね、感情移入することによって感じ取ろうとするような傾向と関連があるようで

ある。感動経験には、自己没入や自他融合の感覚が確かに含まれていることが示唆される。しかし、そのような外界へのかかわり方や関心のあり方は、「動揺しやすさ」が表すような情緒的な不安定性が単純に反映されたものではなく、「愛他的関心」や「他者の立場の理解」が表すような、自分と異なる世界や他者に対して肯定的な関心に向け、それらがもっている内面的な性質を理解しようとする傾向と共通する成分を持っているのであろう。そのような意味で、感動は、受動的に感情を動かされる傾向ではなく、能動的に外界や他者を分かろうとする傾向の表れであるのかもしれない。

本研究においては、感動喚起状況の因子分析、感動と共感性との相関分析など、感動経験の生起を左右する要因の探索的分析に焦点が当てられたが、一方、感動経験を要因として、それが引き起こす心理的变化が発達において果たす役割を検討することも重要であると思われる。実際に速水・陳（1993）は印象深い感動エピソードが自己概念を支える重要な情緒的意味を担う要素となることを示唆している。感動経験は、非常に大きな情緒的揺らぎを与えるだけでなく、新しい価値の発見、自己と感動対象の比較などを通して、活発な自己内省を喚起することがあると思われる。そのような、感動経験による心理的变化の性質と人格の変化への影響について、今後分析・検討を行っていくことが必要であろう。

## 文 献

- 穂山貞登 1981 感情の教育 第一法規出版。
- Davis, M. H. 1983 Measuring Individual Differences in Empathy: Evidence for a Multidimensional Approach, *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 1, 113-126.
- デービス 菊池章夫訳 1999 共感の社会心理学 川島書店 (Davis, M. H. 1996 *Empathy: A Social Psychological Approach* Westview Press, A Division of Harper Collins Publishers)
- 橋本 巖・角田 豊 1992 感情の「わかりにくさ」に関する信念と青年の孤独感・共感性の関係 (II) 愛媛大学教育学部紀要 (教育科学) 39, 1, 63-74.
- 橋本 巖 1995 子ども時代のつらい経験及び情緒的サポートの安定性と大学生の共感性との関係 認知・体験過程研究, 4, 47-62.
- 速水敏彦・陳 恵貞 1993 動機づけ機能としての自伝的記憶 - 感動体験の分析から - 名古屋大学教育学部紀要, 40, 89-98.
- 速水敏彦・高村和代・陳 恵貞・浦上昌則 1996 教師から受けた感動体験 名古屋大学教育学部紀要, 43, 51-63.
- 小谷津孝明 1987 言語理解と共感的認識 心理学評論, 30, 3, 372-386.
- 小谷津孝明・星 薫 1996 改訂版認知心理学 放送大学教育振興会
- 小倉丈佳・橋本 巖 2001 感動経験による自己理解の変化と自己成長 日本教育心理学会第43回総会発表論文集, 207.
- 澤田瑞也 1995 共感的コミュニケーションの発達 澤田瑞也 (編) 人間関係の生涯発達 第3章 培風館
- 戸梶亜紀彦 1997 感動に関する基礎的研究 (1) 日本発達心理学会第8回大会発表論文集, 227.
- 戸梶亜紀彦 1998 感動に関する基礎的研究 (2) 日本発達心理学会第9回大会発表論文集, 30.
- 戸梶亜紀彦 1999a 感動に関する基礎的研究 (3) 日本発達心理学会第10回大会発表論文集, 170.
- 戸梶亜紀彦 1999b 「感動」に関する心理学的・認知科学的考察 日本認知科学会テクニカルレポート 研究分科会「文学と認知・コンピュータ」, 27-32.
- 上田 薫 1986 人間の生きている授業 黎明書房, 162-171.



付 記

本研究は、青年期発達における感動経験の意義について筆者らが取り組んでいる調査研究の一環である。本研究の一部は、日本教育心理学会第43回総会（小倉・橋本，2001）において報告されている。本研究の調査に協力して下さった大学生のみなさんに感謝します。また、多くの助言を下さいました広島大学大学院社会科学研究科助教授戸梶亜紀彦先生に心からお礼申し上げます。